「兄弟抄」講義

文永十二年四月　五十四歳御作

与　池上兄弟　　於　身延

（御書全集一〇八七ページ十行目～一〇八九ページ）

（編年体御書　六八八ページ十行目～六九〇ページ）

されば天台大師の摩訶止観と申す文は天台一期の大事・一代聖教の肝心ぞかし、仏法漢土に渡って五百余年・南北の十師・智は日月に斉く徳は四海に響きしかどもいまだ一代聖教の浅深・勝劣・前後・次第には迷惑してこそ候いしが、智者大師再び仏教をあきらめさせ給うのみならず、妙法蓮華経の五字の蔵の中より一念三千の如意宝珠を取り出して三国の一切衆生に普く与へ給へり

「されば天台大師の摩訶止観と申す文は天台一期の大事・一代聖教の肝心ぞかし」

法華経に三種類あるということは、皆さんもごぞんじであると思いますが、像法年間における法華

経は、摩訶止観になるわけです。釈尊在世においては法華経二十八品、末法今時においては南無妙法蓮華経の五字七字の法華経、天台大師の法華経は摩訶止観です。

したがって、像法年間においては、一代聖教の肝心は摩訶止観なのです。摩訶止観といっても、こんどは文底から拝したならば、ぜんぶ御本尊になるのです。

「仏法漢土に渡って五百余年」

インドから中国に仏法が渡って約五百年後に、天台大師が出現し、摩訶止観の広宣流布があった。正法、像法年間を区切る場合に、五百年、五百年に分けますが、天台大師の出現までが五百年であるということは、ひじょうに不思議に感ずるのです。

それに対して、仏法が日本の国に伝来して約七百年後に、こんどは日蓮大聖人の立宗宣言があり、立宗宣言から七百年後に現在の隆盛があり、ちょうど題目の七文字の、七百年、七百年目にきわだった大事があるのもまた、不思議であります。

「南北十師」――江南の三派、江北の七派のことで、南三北七といいますが、その邪宗十派です。

それらの十師は「智は日月に斉く徳は四海に響き」とあらわされているように、大学者であり、大宗教家であり、大思想家であったけれども、唯仏与仏の境界ではないから、一代聖教の浅深、勝劣、前後、次第には、迷っていた。

また一大事の因縁によって出現した仏ではないから、相伝がないから、以上の理由によって仏法の極理がわかるわけがないのです。南北十派の教えは、知恵に対する知識になってしまうし、実践に対

する理論になってしまうし、仏法の真髄の奥義を会得していないというのです。

「智者大師再び仏教をあきらめさせ給うのみならず」

「智者大師」とは天台大師です。天台大師は、それらの南北十派を打ち破って、仏法の真髄を明かしたのです。

像法年間において成仏の直道はなにか。それは摩訶止観である。しかし、摩訶止観は、理論においても、またその実践においても、まだたいへんにむずかしいものでした。

末法においては、日蓮大聖人が摩訶止観のもっと本源である妙法それ自体を、一幅の曼荼羅(まんだら)としてお明かしくださったわけです。いかなる宿命の人でも、愚かなものでも、不幸なものでも、平等にぜんぶ仏になれる、それが御本尊です。

「教弥(いよい)よ実なれば位弥よ下れり」(御書全集三三九ページ)で、実際問題として、日蓮大聖人は凡夫僧でいらっしゃるけれども、御本仏であり、私ども凡夫をぜんぶ仏にしてくださる御本尊をお残しくださったのです。幸せになる根本は、御本尊以外にないのです。この文の場合は、天台を立てて、天台の摩訶止観のうえから、仏になっていく直道を説明されているわけです。

「一念三千の如意宝珠」ということは、根本的には御本尊ということですが、ここは天台大師の一念三千の法門のことです。

「三国の一切衆生に普く与へ給へり」――三国とはインド、中国、日本です。それらの国々の一切衆生を救うために説かれた法門であるということです。

此の法門は漢土に始るのみならず月氏の論師までも明し給はぬ事なり、然れば章安大師の釈に云く「止観の明静なる前代に未だ聞かず」云云、又云く「天竺の大論尚其の類に非ず」等云云、其の上摩訶止観の第五の巻の一念三千は今一重立ち入たる法門ぞかし

この「一念三千の如意宝珠」という仏法の真髄、極理は、漢土で初めて説かれたばかりでなく、インドの論師ですら明かさなかった法門である。どんな大学者、大宗教家、僧侶たりとも、明かすことのできない、またできなかった法門である。

「章安大師」という人は、天台大師の跡継ぎです。そして、天台大師の説いた「法華文句」、「法華玄義」、「摩訶止観」各十巻、これが天台大師の三大部といって、経文になるわけですが、その摩訶止観を筆録したのは章安大師です。

その章安大師が「止観の明静なる前代に未だ聞かず」――摩訶止観という大仏法哲理は、いまだ前代に聞いたことのない明らかな立派な哲理であり、仏法であるといっているのです。

また章安大師のいうのには、「天竺の大論尚其の類に非ず」――インドの竜樹菩薩の著である有名な大智度論といえども、この摩訶止観にくらべれば問題にならない、とも述べています。

そして、その摩訶止観十巻のなかの第五の巻の一念三千という哲理は、摩訶止観のなかでもとくに

深い法門である、とおおせです。

これは、南無妙法蓮華経ということを、そのまま説けませんから、いろいろと論理的に明かしているのです。

> 此の法門を申すには必ず魔出来すべし魔競はずは正法と知るべからず

大事な御文です。ここはあくまでも摩訶止観のことをさしていますが、しかし、いま日蓮大聖人の弟子として、日蓮大聖人の仏法を拝する身として、「此の法門」とは三大秘法の御本尊のことであり、日蓮正宗の仏法のことであると訳していいのです。

像法の法華経である摩訶止観を奉じ、論じ、それを説法しても難がある。いわんや、それ以上の極理である南無妙法蓮華経を濁悪の末法に説法するならば、折伏するならば、魔は競わないわけは絶対にないという御文なのです。

だから、折伏をするならば、「必ず魔出来すべし魔競はずは正法と知るべからず」、魔が出来しなければ正法ではないのです。天理教、霊友会、立正佼成会などは、いくら広めても、なにも魔が競わないでしょう。

ところが、日蓮正宗の仏法を弘めていった場合、折伏行に励んでいった場合には、個人においても

創価学会においても、魔はたえずあるでしょう。これ正法であるという証拠なのです。正法である証拠であると同時に、仏になれるという証拠でもあるのです。

第五の巻に云く「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る乃至随う可らず畏る可らず之に随えば将に人をして悪道に向わしむ之を畏れば正法を修することを妨ぐ」等云云、此の釈は日蓮が身に当るのみならず門家の明鏡なり謹んで習い伝えて未来の資糧とせよ

三障四魔があったときには、この御文を拝読してください。この御文を身口意の三業で読めば、それで、その人は仏道修行の要に通達したことになるといってもいいのです。

「行解既に勤めぬれば三障四魔紛然として競い起る乃至随う可らず畏る可らず」

これは摩訶止観第五の巻の文です。信心修行がすすめばすすむほど、三障四魔は猛然と競いおこってくる。だが、その魔にしたがってもいけないし、恐れてもいけない。

魔が起きたならば正法である、大功徳を受けられるのだと、まず喜ぶのです。この魔を魔と見破り、魔と戦って、どんなことがあっても「随う可らず畏る可らず」です。

「之に随えば将に人をして悪道に向わしむ之を畏れば正法を修することを妨ぐ」

これにしたがえば、人々を悪道に墮としてしまう。これを恐れてしまったならば、仏道修行はしき

っていけない、仏にはなれない。宿命転換もできない。断固としてこれをいいきればいいのです。これだけわかっていれば、あとはいいのです。

「此の釈は日蓮が身に当るのみならず門家の明鏡なり」

この法門は、日蓮大聖人御自身が身をもって読まれたのであり、日蓮門下の弟子檀那の鏡とすべきである。

「謹んで習い伝えて未来の資糧とせよ」

ちょうどいまは日蓮大聖人立宗七百十年にあたります。その大聖人のおおせどおりに、それを資糧として実行、実践していく人こそ、日蓮大聖人のまことの弟子といえるのです。その弟子が功徳を受け、仏になれないわけは絶対にないと、私は信ずるのです。

この御文を私どもは生涯色心の二法で、色心のこの生命で読んでいこうと、これをきょう決意してもらいたいのです。

此の釈に三障と申すは煩悩障・業障・報障なり、煩悩障と申すは貪瞋癡等によりて障礙出来すべし、業障と申すは妻子等によりて障礙出来すべし、報障と申すは国主父母等によりて障礙出来すべし

これも有名な御文です。三障四魔の「三障」とは、煩悩障、業障、報障をいいます。

「煩悩障と申すは貪瞋癡等によりて障礙出来すべし」

まず第一番目の煩悩障は、貪瞋癡の三毒から、さまざまなかたちでおこるものです。

「座談会へ行こうか。いやそれよりも、家で寝ていたほうがいい」「総本山へ行こうか。いやその電車賃でどこかへ遊びに行きたい」、これ貪りです。

つぎに瞋りとは、感情です。「あの人に怒られたけど、なにも文句をいわれる必要はない」「学会は強すぎるからもうやめよう」などというのは感情です。これは自分自身の魔です。自分が永遠に幸福になっていくのだ、丈夫になるのだ、一言一句でも教わって自分の財産にしようという心を、自分で妨げてしまうのです。

それから、つぎは癡でしょう。題目をしっかりあげていけば「以信代慧」になってわかってくるけれども、題目をあげないで、自分の頭だけで判断して、指導を受けない。御書にわれわれが信じていくあり方が書いてあるのに、それもわからないで批判したり、ぜんぶ自分の心のなかの障です。

また、女の人は男の人に引きずられたり、男は男で女の人に迷って信心が進まなくなったり、商売に失敗して、いくら信心しても功徳がないなどと自分で決めこんでしまったり、これも癡かです。自分の一念から起きているのです。

いずれにしても、それを打ち破っていくのは題目です。それから、すこしでも自分がそういう弱い心になった場合は、自分を引き上げてくれる人に接していくこと、また、そういう和合僧の雰囲気に

なじんでいこうと努力する以外にありません。いずれも根本は題目です。
魔はかならずでてくるのです。むしろ信心が長くなってきた人が危いのです。「行解既に勤めぬれば」ですから、信心が五年、七年、十年、十四、五年になってきた人が危いのです。だれも、「それが魔ですよ」とはいってくれない。心が退転してはなりません。これが煩悩障です。
「業障と申すは妻子等によりて障礙出来すべし」
これは、もっとも気をつけてもらいたいところなのです。
かつて牧口初代会長、戸田二代会長が牢にはいったとき、まず退転したのは幹部の夫人たちだった。「すべて牧口先生が悪い。戸田先生が悪い」といいだした。牢から夫を早く出したいと思うあまり、同志をも憎むようになってしまうのです。人の心というものは恐ろしいものです。だから、そういうことのないようにしていただきたいのです。
しかし一面においては、女性は大事なのです。戸田先生も「広宣流布は婦人の手によって」と激励されておりました。これを縮図して一家においても、皆さん方がよく気をつけなければならない場合があるのです。夫が七の力しかない場合に、妻が立派であれば十にしていける。逆に夫が十の力があっても、妻が愚かであれば七にも五にも減じてしまう。へたすれば夫を落としてしまう。それほど大事な役目なのです。
「報障と申すは国主父母等によりて障礙出来すべし」
第三の報障は、国主、国家権力、それから大事なお父さんやお母さんが反対して信心を妨げること

をいうのです。

又四魔の中に天子魔と申すも是くの如し今日本国に我も止観を得たり我も止観を得たりと云う人人誰か三障四魔競へる人あるや

三障四魔の四魔のなかに「天子魔」という魔がある。第六天の魔王と魔民によって起こり、父母、妻子、権力者等のあらゆる姿をもって、仏道修行を妨げようとする働きのことである。四魔は、天子魔、死魔、煩悩魔、蘊魔です。

「今日本国に我も止観を得たり我も止観を得たりと云う人人誰か三障四魔競へる人あるや」

これは、現在にあてはめていえば、日蓮大聖人の仏法を学し、日蓮大聖人の仏法を修行しているという人はたくさんいるようであるけれども、だれびとも真実に実践してはいないという証拠の御文なのです。

なぜかならば、だれに、三障四魔が起きているか。だれにも起きてはいない。それは、正法を修していない証拠ではないか。

ということは、いま日蓮宗と名のる宗派の僧の、だれびとが法難にあっているか。三障四魔にあっているか、天子魔にあっているか。あっていない。ただひとり日蓮大聖人の正統である日蓮正宗創価

学会だけが、三障四魔と戦っているのでしょう。

> 之に随えば将に人をして悪道に向わしむと申すは只三悪道のみならず人天・九界を皆悪道とかけり、されば法華経を除きて華厳・阿含・方等・般若・涅槃・大日経等なり、天台宗を除きて余の七宗の人人は人を悪道に向わしむる獄卒なり、天台宗の人人の中にも法華経を信ずるやうにて人を爾前へやるは悪道に人をつかはす獄卒なり

これは厳しいおことばです。摩訶止観第五の巻の文のなかに「之に随えば将に人をして悪道に向わしむ」という文があります。

その意味は、そういう人に随ってしまうなら、地獄、餓鬼、畜生界の三悪道に堕ちるというだけではない。人界、天界、九界までみな悪道となるのである。仏法のうえにおいては、絶対に成仏するということが人生の目的であるがゆえに、それ以外はぜんぶ悪道になってしまうのです。峻厳なる戒めです。

「されば法華経を除きて」――この法華経は、日蓮大聖人の南無妙法蓮華経の法華経です。

「天台宗を除きて余の七宗の人人は人を悪道に向わしむる獄卒なり」

また七宗（倶舎、成実、律、法相、三論、華厳の南都六宗と真言宗）は、人々をぜんぶ悪道に向かわせて

いく獄卒なのである。その原理からいけば、今の日蓮宗各派も新興宗教も、そのなかにぜんぶはいるでしょう。

このように日蓮大聖人が厳しくおおせになったそのとおりに、私たちはいっているのです。世間で、創価学会は折伏で邪宗教、邪宗教と悪口をいうのが悪いというけれども、末法の御本仏が宣言していらっしゃる、そのとおりにいっているのです。

さらに「天台宗の人人の中にも法華経を信ずるやうにて人を爾前へやるは悪道に人をつかはす獄卒なり」と。

天台宗の人々のなかにおいても、法華経を信じているようであるけれども、事実は、心は爾前経を信じていて、人をも悪道に堕としている獄卒がたくさんいる。また、真実の法華経を行じきれないで、我見で、邪見で法華経を行じている人もたくさんいる。これも獄卒であると喝破されているのです。伝教大師いわく「法華経を讃すと雖も還って法華の心を死す」とは、まさにこのことです。

日蓮大聖人の仏法を学し、日蓮大聖人の仏法を賛嘆する人はたくさんいるようであるけれども、同じく悪道に人をつかわす獄卒がたくさんいるわけでしょう。正しく成仏へ導いていくのは日蓮正宗しかないのです。この御文から推測すれば、はっきりわかります。

今二人の人人は隠士と烈士とのごとし一もかけなば成ずべからず、譬えば鳥の二つの羽人の両

眼の如し

この「二人」というのは池上兄弟です。兄を大夫志宗仲といい、弟を兵衛志宗長といいます。二人の信心に、父の康光は反対でしたが、とうとう兄の宗仲が勘当されるという事態にいたりました。そのとき、大聖人より慈愛あふれる御指導をたまわったのが、この「兄弟抄」です。

池上兄弟二人は「隠士と烈士」のようなものである、とおおせです。隠士と烈士については、同じくこの「兄弟抄」のまえのところ（御書全集一〇八六ページ）にくわしく書かれてあります。

隠士が仙人になる法を修するのに、烈士の協力が必要でした。隠士の修行中、烈士は絶対に口をきいてはいけないといわれ、固く約束したが、つぎからつぎへと競いおこる魔に負けて最後にとうとう声を発してしまったため、隠士はついに仙人の法を成ずることができなかったというのです。

この池上兄弟も同じく、どちらが欠けても成就できない、二人が団結してお父さんを折伏し、成仏していきなさい、と激励されているのです。

「鳥の二つの羽人の両眼の如し」

みんな、こういう気持ちで団結していきたいものです。夫婦もそうであると同時に、兄弟も、そして、とくに同志は、広宣流布という目的に向かっての団結が大切です。そのような日蓮大聖人の御指導と拝していいのです。私ども仏法を信ずる身として、親類兄弟よりも、仏法の世界の契りというものは、もっともっと深い次元になるのです。

又二人の御前(ごぜ)達は此の人人の檀那ぞかし女人となる事は物に随って物を随える身なり夫たのし(おとこ)
くば妻もさかふべし(栄)夫盗人ならば妻も盗人なるべし

この「二人の御前」というのは、この兄弟の奥さんでしょう。「檀那ぞかし」という、檀那という場合は、ふつう施主と訳するのですが、ここでは主人を守っている保護者という意味です。

「女人となる事は物に随って物を随える身なり」

この御文は有名です。これは、皆さん方が思索してください。また実践してください。

たいていは、物に随わなくて、物を随えさせてしまうものです。つごうがいいところは随って、つごうが悪いところは随わないで、随わなくてはならないときに随わないで、随ってもらわなくてもいいときに随ってしまうものです。この御文どおりに、どうか信心で実践していただきたいと思うのです。ただし、自分なりに、御書を利用して、つごうがいいように読んではいけません。

「夫たのしくば妻もさかふべし」――これは、このとおりです。逆に、夫が退転してしまったならば、ちょうど夫が盗人ならば妻も盗人と同じように、いっしょに地獄へ行ってしまうのです。

どうか信心を根幹としてご主人をしっかり激励してください。妻の信心が大切なのですよ、と兄弟の夫人たちにも指導されているのです。

是れ偏に今生計りの事にはあらず世世・生生に影と身と華と果と根と葉との如くにておはする
ぞかし、木にすむ虫は木をはむ・水にある魚は水をくらふ・芝かるれば蘭なく松さかうれば柏
よろこぶ、草木すら是くの如し

「是れ偏に今生計りの事にはあらず世世・生生に影と身と」云云ということは、永遠の生命を明かしていらっしゃるのです。

夫婦の絆、またその因果というものは、今世ばかりのことではない。影あればかならず身があり、華が咲けばかならず果がなる、根が深ければ葉もしげるように、生々世々にどこまでもいっしょなのです。

今世のふるまいが世々、生々、因果の理法によって、ずーっと縮図されていくのです。ですからいちばん大事なのは、御本尊を根幹として妙法に照らされた現在なのです。

「過去の因を知らんと欲せば其の現在の果を見よ未来の果を知らんと欲せば其の現在の因を見よ」(御書全集二三一ページ)なのです。

仏法の世界においては、御本尊に照らされて、いま激励を受けたり、いま薫陶を受けたり、いま自分が題目を唱えて宿命転換をしようと決意した場合には、その瞬間からもう成長していくのです。

「草木すら是くの如し」――木にすむ虫は木を食べて、また水にすむ魚は水を飲んで生きている。また芝が枯れれば蘭も生きていけない。松が栄えば、柏も喜ぶ。畜生や草木すら、助けあって生きているのです。いわんや人間として、また仏法を学する者においてをやです。

比翼と申す鳥は身は一つにて頭二つあり二つの口より入る物・一身を養ふ、比目ひほくと申す魚は一目づつある故に一生が間は離なるる事なし、夫と妻とは是くの如し此の法門のゆへには設ひ夫に害せらるるとも悔ゆる事なかれ、一同して夫の心をいさめば竜女が跡をつぎ末代悪世の女人の成仏の手本と成り給うべし

「比翼」という鳥のことは、白楽天の長恨歌という詩のなかにもありますが、雌雄それぞれ一目一翼で、つねに一体となって飛ぶといわれます。「比目」という魚も同じように一目しかないので、二匹が並んで泳ぐといわれています。そして一生涯離れることはない。夫婦というのは、このように仲むつまじく、ともに助けあい、支えあっていくものだとおおせです。

「此の法門のゆへには設ひ夫に害せらるるとも悔ゆる事なかれ」

信心、御本尊のことについてだけは、たとい、夫にたたかれようが、害されようが、あくまでもいさめるべきである。信心しきっていくべきである。これは日蓮大聖人の御教訓です。いざという場合

には、婦人が大事です。信心さえ貫き通すならば、夫を救えるのです。

そして、夫人たちが力を合わせて兄弟の信心をいさめていくならば、竜女が仏になったあとをついで、末代悪世の女人の成仏の手本となると激励されているのです。

> 此くの如くおはさば設ひいかなる事ありとも日蓮が二聖・二天・十羅刹・釈迦・多宝に申して順次生に仏になし・たてまつるべし

「此くの如くおはさば」――日蓮大聖人のおおせどおりに実践していくならば、「設ひいかなる事ありとも」――たとえどんなことがあってもということです。こういう小さいことばを信心で読まなくてはいけません。絶対にそれを自分のものとして実践しなくてはいけません。

「二聖・二天」――二聖は勇施、薬王。二天は毘沙門天（多聞天）、大持国天をいいます。

日蓮大聖人が、二聖、二天、十羅刹、そして釈迦、多宝にも命令して「順次生に仏になし・たてまつるべし」と。すなわち、永久に幸福を与える、御本尊のもとに生まれてこられる、壊れない仏の境界で人生を送っていけるようにしてあげましょう、と。ありがたいおことばではないですか。難に遭っている弟子をお思いくださる、日蓮大聖人の厳然たる御確信です。

心の師とは・なるとも心を師とせざれとは六波羅蜜経の文なり

「心の師とは・なるとも心を師とせざれ」、これも有名な御文ですが、六波羅蜜経にあります。

心というものは微妙なもので、自分ではどうしようもないものです。それを正しく位置づけるには、どうしても師が必要です。

私たちの信心にあてはめてみれば、御本尊を拝することが「心の師」にあたります。

または、広くいえば、信心強盛な先輩について指導をうけ、意見をきくことも「心の師とは・なるとも」にはいるのです。

「心を師とせざれ」ということは、我見や感情のままに判断したり、行動したりしてはいけない。あてにならない自分の心を師とするところに、不幸があるのです。

御本尊を根本とし、それから仏法の指導を根本としていくことが「心の師とは・なるとも」にはいるし、そこに自身の成長と価値創造がある。反対に「心を師とする」とは自分を中心にして、仏法の原理を聞かなかったり、御本尊を第二義にしたり、それから指導を第二義にするがゆえに、成長も前進もないのです。

法華経陀羅尼品にも「若し我が呪に順ぜずして　説法者を悩乱せば　頭破れて七分に作ること　阿梨樹の枝の如くならん」（妙法蓮華経並開結六四五ページ）との文があります。これは、よく御書にも引用さ

れていますけれども、法華経の行者を迫害すれば罰があるという文証です。

つぎに「世尊、我等亦当に身自ら是の経を受持し、読誦し、修行せん者を擁護して安穏なることを得」ともあります。今でいえば、御本尊を持って折伏する人を守るという意味になります。

そのつぎに「諸の衰患を離れ、衆の毒薬を消さしむべし」とは、衰退したり、患わないで、いっさいの毒といっさいの不幸を消してしまうということです。こういう経文もあります。

設ひ・いかなる・わづらはしき事ありとも夢になして只法華経の事のみさはぐらせ給うべし

「設ひ・いかなる・わづらはしき事ありとも夢になして」

どんなにわずらわしいことがあっても、そんなことは夢と思っていきなさい、とおおせです。私たちも、そう決めてしまいましょう。どんなに苦しいことが山ほどあっても、それは夢だと笑って進みましょう。たしかに、御本尊を根本として信心をきちんとしていけば、そんな悩みなどは、もう幻影のようなものです。この世の中は、一面では、諸行無常です。本有常住は御本尊しかないのです。

「只法華経の事のみさはぐらせ給うべし」

御本尊のことだけ考えていきなさい、というのです。広宣流布のことだけ考えていけばいいのではないですか。あとは、どんな事件があろうが、いやなことがあろうが、たいしたことはないというの

です。

信じられるのは、根本は御本尊だけです。ですから御本尊、それから御書を中心にして、永遠の幸福をめざし、一生成仏を願い、そのことを思索していきましょう。

お金などいくらあっても死ぬときに持っていけません。いくら名誉をもっても、自分はたいしたものだと思っても、人がみてくれないことはたくさんあります。いくらいいものを着ても百年着られません。みんな一時的な虚栄にすぎません。

中にも日蓮が法門は古へこそ信じかたかりしが今は前前いひをきし事既にあひぬればよしなく誇ぜし人人も悔る心あるべし、設ひこれより後に信ずる男女ありとも各各にはかへ思ふべからず

日蓮大聖人が「真言亡国、禅天魔」と、大折伏行に御活躍をなされたが、初めは南無妙法蓮華経を信じ、唱える人は、少なかった。かえって、迫害ばかりして、批判ばかりしていたけれども、日蓮大聖人が「立正安国論」等で予言された「他国侵逼難」「自界叛逆難」がそのとおりに的中した。それにびっくりして、理由もなく誇じていた人も、批判していた人も徐々に悔いる心がおきてきたことでしょう。また、信心する人がふえてくるでしょう、こういう意味です。

「設ひこれより後に信ずる男女ありとも各各にはかへ思ふべからず」

これから、たくさん信心する人がいるかもしれないけれども、池上兄弟のほうが、薫陶もたくさん受け、信心も古いのですから、ずっと、あなた方のほうを信頼していますよ、とおおせです。

始(はじめ)は信じてありしかども世間のをそろしさにすつる(捨)人人かず(数)をしらず、其の中に返って本より謗ずる人人よりも強盛にそしる人人又あまたあり、在世にも善星比丘(ぜんしょうびく)等は始は信じてありしかども後にすつるのみならず返って仏をはう(謗)じ奉りしゆへに仏も叶い給はず無間地獄にをちにき

これは、このとおりです。はじめは、せっかく信心しても、世間の批判がこわくて捨てる人は数を知らないというのです。いままでの歴史でも、どれだけ退転したことか。批判記事が新聞にでたとか、悪口をいわれたとか、そんなことで退転するぐらい、みっともないことはない。どんなことがあっても退転だけはしてはいけません。

信心するのに世間の目を恐れて、なにが幸せになれますか。では、新聞記事や雑誌記事や世間の人が幸せにしてくれるか。してくれはしません。目先のちょっとしたことに紛動されて、一生の幸福を、いな永遠の幸福を破壊してしまうのは、もっともおろかなことです。

日蓮大聖人の時代においてさえも、御本仏がいらっしゃっても、世間の恐ろしさに捨てる人は、た

くさんいたのです。いわんや、これからがほんとうに大事なのです。

「其の中に返って本より謗ずる人人よりも強盛にそしる人人又あまたあり」

「佐渡御書」をみても、残念ながらそういう事実があったのです。そして日蓮大聖人の時代にあったことは、今もあるのです。一度は日蓮大聖人の弟子となっても、やがて退転して批判する人もある。こういう人は、もとから謗じている人よりも、かえって強く謗ずるというのです。こわいことです。こういうことを、よくみきわめていくべきです。

「在世にも善星比丘等は始は信じてありしかども後にすつるのみならず返って仏をはうじ奉りしゆへに仏も叶い給はず無間地獄にをちにき」

釈尊在世において、善星比丘という比丘は、初めは釈尊の弟子として信心したけれども、のちには捨てて、かえって仏を謗じた。釈尊の慈悲をもってしてもどうしようもなく、ついに無間地獄に墮ちたというのです。

善星比丘というのは、釈尊の太子の時代の三人の子供の一人といわれています。子供であっても、これだけ師敵対するのです。釈尊在世においても、こういうことがあるのだとおおせです。そういう因縁、役目があり、悪役があるのです。

このことは、日蓮大聖人の弟子として、退転して、日蓮大聖人をそしったからといって不思議に思うことはないのです。御本尊に功徳がないから退転しているのではないのだよ、という御文と拝せばいいのです。

皆さん方も、退転して「御本尊に功徳がないから……」などという人に対しては、この御書をみせてあげればいいのです。「釈尊の子供だって釈尊に敵対して地獄に堕ちている」と。なにも恐れることはありません。皆さん方が退転しても同じことです。地獄へ堕ちていくのです。御本尊は絶対なのです。あとは、おのおのの信心です。

此の御文は別してひやうへの志殿へまいらせ候、又太夫志殿の女房兵衛志殿の女房によくよく申しきかせさせ給うべし・きかせさせ給うべし・南無妙法蓮華経・南無妙法蓮華経。

文永十二年四月十六日　　日蓮花押

この「兄弟抄」は、池上兄弟にあてられたものですが、別しては、弟の兵衛志宗長にさしあげたお手紙であるとおおせです。兄が勘当されたのをみて、兄よりも信心の弱い弟のほうの動揺を心配されたからでありましょう。

また、兄の太夫志宗仲の夫人、弟の宗長の夫人にも、よくよく読んできかせてあげなさい、ともおおせです。「よくよく」というそのひとことに、この御書の指導どおり、しっかりと実践していってほしいという、大聖人の願いがこめられているように思われます。

（昭和三十七年四月十二日）